

「友よ」

(ルカによる福音書 14:1,7-14)

招かれたとき、上席に座りたがると恥をかくが、末席に座れば上席を勧められ「面目を施すこと」になる、と主イエスは言われます。ここで「面目」とされている言葉は、「栄光」とも訳される単語です。高ぶる者を低め、低き者に栄光を与えるのは神です。ですから、宴席に人を招いているのは神です。その神が末席に座っている人に近づき、「さあ、もっと上席に」と言われます。「さあ」と訳されているのは、「フィロス」というギリシャ語で、「愛する友よ」という意味です。たとえば、自分など場違いではないか、と思われるようなパーティに招かれ、ドキドキして心配しているところに、主催者が「あなたこそわたしの愛する友だ。さあ、もっと良い席でくつろいでいってくれ。」と言ってもてなしてくれる。これが神の国であり、「面目」つまり栄光が与えられる、ということです。「招かれたときには末席に」というのは、単なる处世術ではなく、神の前での「へりくだり」を教えているのです。神の招きにわたしたちがどういう態度で臨むのか、それが問われています。

さて、主イエスは次に「招くとき」にとるべき態度を語ります。招かれ、声をかけられ、神からの恵みを頂いた者は、今度は自分が人を招き、その恵みを伝えることが求められています。しかしこの場合には、「招かれたとき」の「末席に座る」ことよりも、もっと難しいことが求められます。末席に座ることの先には「上席を進められ、面目が施される」ご褒美が見えています。しかし主イエスは、「招くとき」には「お返しができる人を呼んではならない」と言われます。人間的、この世的な「栄光」を大事にする者は、自分の身内や、近所の金持ちなど、自分に利益をもたらしてくれる存在にばかり目が向きます。その心は自分の利益が最大の関心事であり、人からの栄光を期待してばかりです。しかしそれでは、神との関わりの中で生きることができません。人からの栄光を期待してばかりいると、神からの「友よ」という招きの声が聞こえなくなってしまう、神からの栄光、神の国の宴席に与えることはできないからです。その人は、本当に多様な人々と共にする素晴らしい交わりの食卓から自ら離れてしまうことになります。

人からの栄誉を求めのではなく、神からの栄光に目を開くところに、想像を超えた素晴らしい食卓、栄光が用意されています。